

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

結論をまづは述べよと言ふ息子よ長々話を母は楽しむ

△評▽ユーモアを感じさせる面白い歌。文
体から察するに、落ち着いてしっかりした
母だ。その母に息子は何と答えただろう。
もうずっと前から言っていただろう。暑い、
腹減る 熊の限界 池田市 黒木 淳子

△評▽人里への熊の出没に脅かされている
が、熊には熊の言い分があるのだと歌う。
熱帯夜潜りてひとり浜に行く約束もなき亀と
の逢瀬 延岡市 河野 正

参列者の誰よりも若い住職に人生は長い旅と
説かれる 長岡市 三月 とあ

頑張りを見ている人はきつといる見ているだ
けであったとしても 東京 富見井高志
その先をまだ描き終えていないのに色が足り
ない私のパレット 横浜市 及川 秀代

リュック背に出陣のごとくメモもって夫初めて
のスーパーに行く 尼崎市 小石 絹子

結婚はピアノとしてたあの頃の我に欠かせぬ
「愛の挨拶」 札幌市 住吉和歌子

仰ぎ見るひまわりの茎たくましく背筋を伸ば
し一歩近寄る 茨川市 白勢 美晴

いい人がいるよと紹介されたとき恋に破れる
いい人はきみ 相模原市 榎本 ハナ

米川千嘉子 選

団塊のわがが信じた人かんばれは時には人
間を殺しもしたり 東京 池崎富実夫

△評▽がむしゃらに働き頑張ることをみん
なが善と信じた時代。過労死という言葉さ
えなかった時代の犠牲者はどれほど。
主婦という身の頼りなき満月も自ら光る術を
持たない 東海市 中山あゆみ

△評▽専業主婦がなくなった時代。それ
を選ぶ理由がそれぞれあるはずなのに。
さみしさを日記と訴ふる母の手を両手に包む
夫と交替で 伊丹市 岡本 信子

バスもない故郷の親に東京の子らが促す免許
返納 京都市 寺西 和史
ため息を潰してぶんぶんかき混ぜるブレンダ
ーを探す夕暮れ 三重 中山由賀子

いらしゃませ、ありがたござます、深夜定食ほ
ろみ満ちて礼儀正しき 小平市 真鍋 真悟
手に入れた米を電車で持ち帰り敗戦直後のヤ
ミ米を思う 国立市 佐藤 建

給食着にアイロンかける夜半過ぎ傷つけた人
への祈りのことく 東京 岡田さやか
誕生日眼の不自由な私のこと励ます声は初盆
の母 紀の川市 林 史子

ザルを出し土用の光に梅を干す二尺玉に星つ
めること 上越市 戸枝 誠

加藤 治郎 選

平熱のまま醒めているままダリの時計を顔に
かぶりたい、今 大津市 世田 夏雪

△評▽「記憶の固執」である。溶けて柔ら
かくなった時計をかぶる。すさまじい衝動
だ。個性的なリズムだが31音になっている。
ポエトリー・リーディング付きデスマッチ、ノ
ーローフ・有刺鉄線にて雲南市 熱田 俊月

△評▽詩の朗読のあるデスマッチとは優雅
で破天荒だ。命がけの試合なのである。
どの空も夕焼け小焼けこの世からこころを無
くすることはできない 長岡市 三月 とあ

逢いにゆくはつ夏の風裂きながらラピスラズ
リのピアス揺らして 兵庫 廣澤 真希
境内に手繰りこころ追いかける永井陽子よ水
無月のゆめ 春日部市 宮代 康志

鳥に似た女が好きだ瘦せていて誰も愛さずき
れいに歌う 宮古島市 塩見 伴
髪を切る 口笛を吹く 渾身のスキップをし
てすこしだけ泣く 東京 境 千尋

「東急の電車が遅れた任侠で」私の耳はど
うかしている 狭山市 りんか
自画像を描くの絵の具十二色俺は 色灰色
だけだ 大阪市 吉田 昌之

「ジョンです」と呼び止められて身振り手振
りで寿司屋を教える 札幌市 橋 晃弘

水原 紫苑 選

ふるさとの駅のホームに立つ父は水面をわた
る光のように 京都市 右手のハンマー

△評▽水面をわたる光のような父は存在の
核心を見せた。生のうちにいくたびもない
出会いに詩にふさわしい。
心臓を磁石のようにふるわせて夜の浅瀬に鳥
交りたり 加古川市 石村 まい

△評▽空を飛ぶ鳥が地上の浅瀬で交わるこ
との意味が心臓をふるわせる。
無秩序な羊の群れをマエストロ・ボーダー・
コリーが指揮する牧場 横浜 砂月 七

海や空は繋がってもう遠い国で起こったこと
と思わない 名古屋 市 田中 だか
ひとと死にほしも死ぬならもうすこし生きて
みようか夕顔の花 宮古島市 塩見 伴

雨の日はいつもよりちょっと親密になる教室
の明かり白くて 東京 遠野 鈴
表の顔は笑つてゐても裏の顔は怖いぞ満月を
擲擲すれば 甲府市 村田 一広

死は生と対でもらった翠なす初夏の風樹々
洗つをやめず 宮津市 野ばら
叶えたいものをさらってひき潮のあとに背骨
のような砂浜 高島市 くらたか湖春

カーテンのすき間から見る星の名を知ること
もなく灯りを消した 札幌市 橋 晃弘

投稿規定

はがき1枚に
選者を指定し、
未発表の自作を
2首・2句まで。住所、氏名、年齢、
職業、電話番号を明記し、宛先は
〒100-8051(住所不要)毎日新聞
学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選
者名)係へ。毎日新聞デジタルの投
稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けて
います。
他媒体との二重投稿や、同一作品
を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削する
ことがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メデ
ィアやデータベース、アプリ「俳句て
ふてふ」で公開し、本社が作成また
は許諾した出版物やメディアに掲載
することがあります。